

# 埼臨技だより



発行所 公益社団法人 埼玉県臨床検査技師会 〒330-0072 さいたま市浦和区領家7-14-7  
TEL 048(824)4077 FAX 048(824)4095 URL:<http://www.sairingi.com/>  
携帯URL:<http://www.sairingi.com/keitai/index.html> X(旧Twitter): @sairingi

## 第52回 埼玉県医学検査学会のお知らせ

開催日：令和6年12月8日(日)

会場：ソニックシティ

テーマ：Challenge!

サブテーマ：～多様化するニーズへの実践と進化～



第52回埼玉県医学検査学会  
実行委員長 塚原 晃

### 「演題登録ありがとうございました！」

7月31日(水)演題登録締め切りをもちまして、一般演題67題、学生演題22題、CM演題7題、合計96題と多くの会員・賛助会員、学生から演題登録をいただきました。日常業務のお忙しい中にもかかわらず、誠にありがとうございました。また、賛助会員の皆様にはランチョンセミナー、広告、企業展示など多くの協賛を賜り、重ねて御礼申し上げます。

「第52回埼玉県医学検査学会」開催まで、残り3ヶ月を切りました。HPでの木暮学会長挨拶にもありますが、多様化するニーズへの実践やチャレンジのその先に、我々の働く検査室、また臨床検査技師個々の進化があるという思いから、学会テーマ「Challenge!」としております。参加する皆様の「明日からの一歩(Challenge!)」にふさわしい場となるよう、実行委員一同、皆さまをお迎えする準備を着々と進めております。

本学会では2つの特別講演と2つの教育講演、5つの研究班企画を用意いたしました。ご担当いただく講師もほぼ決定し、プログラムも大枠が固まってきました。皆様へお届けする学会特集号のページ構成に、これから本腰をいれていきます。次回以降のお知らせも楽しみにしてください！

第52回埼玉県医学検査学会  
学術部長 小原 明

### 「発表方法・スライド作成について」

第52回埼玉県医学検査学会に多くの演題を登録いただき御礼申し上げます。演者の皆様におかれましては、スライド作成の作業に取り掛かる頃かと思えます。そこで、今回は演題の発表方法とスライド作成(利益相反の開示)についてお知らせいたします。

#### 《発表方法について》

発表はパソコンを使用したスライド投影による口演形式です。

一般演題の発表時間は、1演題につき発表6分、質疑応答3分の計9分です。

コマーシャル演題は、発表・質疑応答合わせて15分以内です。

### 《発表スライドについて》

発表はパソコンを使用した口演形式で行いますので、以下の注意事項にしたがって発表用スライドを作成し、送付してください。なお、送付方法については、次号の埼臨技だよりにてお知らせいたします。

#### 1. 口演スライドの作成方法

- 1) OSはMicrosoft Windows10または11、アプリケーションソフトはMicrosoft Power Point2019または2021を使用します。Mac OSは使用できませんのでご注意ください。

※ページ設定は「ワイド画面16：9」に設定し作成してください。「ワイド画面16：9」の設定は、「デザイン」→「スライドのサイズ」→「ワイド画面16：9」から行えます。

#### 2) 動画使用の注意

- ① 標準のWindows Media Playerで動作する形式（MPEG 1、MPEG 2、MPEG 4/AVC (H.264)、DivX、WMV）をご使用ください。なお、符号化や特殊な圧縮（コーデック）をしたものは使用しないでください。また、音声の使用はできません。

解像度は、720×180ピクセル程度、デジタルハイビジョンやフルハイビジョンは避けてください。

- ② 動画再生が不安な場合は、複数の形式を使用してください。

#### 3) 図表作成の注意

- ① 図表を作成する場合は、遠くからでもはっきりみえる簡潔なものにしてください。
- ② 注意して見てほしい箇所は目立つように工夫してください。
- ③ グラフのX軸・Y軸の項目や単位を忘れないで記入してください。

- 4) スライドに使用する文字は、特殊なフォントは使用せずMicrosoft Windows10または11に標準搭載されているフォントのご使用をお奨めします。

### 《利益相反（COI）の開示について》

利益相反とは、ある行為によって一方の利益になると同時に、他方への不利益になる状態を指します。

1. 埼玉県医学検査学会の発表は、利益相反の開示が義務づけられております。

開示基準その他の詳細については、JAMTのホームページの会員専用サイトにログインし、『利益相反』を開いてご確認ください。

2. 利益相反の自己申告は、発表スライドの1枚目の最下段に下記の申告内容を記載してください。

- 1) 利益相反無しの場合・・・利益相反の有無：無

※この演題の発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

- 2) 利益相反有りの場合・・・利益相反の有無：有

※この演題の発表に関し、開示すべきCOI関係にある企業名

〇〇〇〇株式会社、(株)□□□□

- 3) 記入例

〇〇〇の検討について

△△病院 臨床検査部

埼玉 県一

利益相反の有無：無

※この演題の発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

### 《はじめて学会発表する方へ》

発表用スライドができ上がったら、読み上げ用の原稿を作成し、声に出して読み返してみましよう。間違えずに読めるようになったら、実際にスライドを使用して職場の先輩や同僚の前で発表し、質問してもらいましょう。パソコン操作や人前で話すことで、発表時間にずれが生じることもあれば、予期せぬ質問に慌ててしまうこともありますので、何回か予演会を行なうことをお勧めします。また、事前に自分の発表に対して質問とその回答をいくつか書き出しておく、落ち着いて



できるというポイントの説明があった。各基本操作において、注意点を把握することで、人為的ミスを防ぐことができると理解できた。第3ステップとなる凝集強度の見方では、各反応強度の写真が提示されており、凝集の特徴や背景の色調に関して大変分かりやすく認識することができた。弱い凝集でも見落とさないために、試験管の傾け方やセルボタンの流し方を習得することで、誤判定を防止することができる。

岩崎氏の講演の不規則抗体検査では、不規則抗体の基礎とスクリーニングから同定検査までの検査の流れと消去法についての説明があった。複数の症例を提示し、消去法の考え方が大変よく理解できた。同定検査において、否定できない抗体が残ってしまった場合の追加検査の進め方や薬剤による影響など、実際のルーチン業務での対応方法も含めて説明があり、明日からの業務にも役立つ内容であった。

安全な輸血医療の提供は検査を行う臨床検査技師の力量に大きな影響を受けるため、検査実施者はその影響を理解しておくことが重要である。今回の講演の内容をルーチン業務に生かすことで、各個人の力量の向上に繋がると考える。7月に行う実技研修会においても、参加者がよりスキルアップできる研修会を行っていきたい。

(文責：宮澤翔子)

## テーマ 目指せ一般検査マスター！ ～ 苦手意識を克服へ～

主催 一般検査研究班

実施日時：2024年7月11日 19時00分～21時00分

会場：RaiBoC Hall 集会室1 教科・点数：専門教科-20点

講演 1：尿定性検査・尿沈渣検査について

講師 1：小針 奈穂美（埼玉医科大学病院）

講演 2：髄液検査について

講師 2：柿沼 智史（川口市立病院）

講演 3：体腔液検査について

講師 3：中川 禎己（小川赤十字病院）

講演 4：便検査について

講師 4：松本 実華（自治医科大学附属さいたま医療センター）

参加人数：会員39名

出席した研究班班員：藤村和夫 柿沼智史 渡邊裕樹 中川禎己 小針奈穂美 松本実華  
織田喜子 林達矢 福島明音

研修内容の概要・感想など

一般検査研究班主催の研修会を今年度初めて、現地にて開催した。

講演1の小針氏は、尿沈渣の症例を問題形式で出題をし、解説を進めていった。普段遭遇するであろう、赤血球形態やピットフォールに陥りやすい類似した沈渣成分（尿細管上皮細胞と尿路上皮細胞、ろう様円柱と糞便成分）などを取り上げ、詳しく説明をした。尿細管上皮細胞は多様性に富んでおり多数出現した場合臨床的意義も高い。AKIなどの急性疾患では薬剤による尿細管壊死なども念頭に慎重に、かつ迅速性が求められる。糞便成分が出現した際、コンタミネーションなのか疾患による混入なのか判断が重要となる。沈渣成分から病態が推測できるように特徴を理解することが重要であると考えた。

講演2の柿沼氏は、髄液中に出現する細胞の鑑別や特徴を説明した。髄液検査は緊急性が高く迅速さが求められる。白血球の鑑別として、核だけで判断せず細胞質の色調をよく観察することが重要である。赤芽球は単核球と判断してしまう事例も取り上げた。また実際におこった事例として計算盤にサムソン液を注入し静置せずすぐに観察すると細胞が沈降されず見落としにつながってしまう。目合わせが難しい髄液は、サムソン液添加後4℃保存で5日間は安定す



る。保存された同一検体を用い内部精度管理としてトレーニングを行うことが可能である。技術の共有をすることで基本的な操作や知識が得られると考える。

講師3の中川氏は胸水・腹水・心嚢液の特徴を詳しく説明をした。これらの領域は一般部門だけでなく病理・血液・生化学などの多部門にわたって結果が求められる。生化学検査で項目を分析し、その結果によって胸水ではLightの基準によって、漏出液か浸出液かの判断ができる。病理・血液検査では細胞をギムザ染色することで悪性細胞とそれ以外の細胞の存在の有無が重要となってくる。また関節液検査では炎症性か非炎症性かの判別をすることにより病態の推測が可能となる。また粘稠度が高い場合（3～5 cm糸を引く）が正常であり、粘稠度が低い場合は化膿性関節炎や痛風などの病態が考えられる。しかし提出される検体数が少数だと経験不足になり、判断に迷う場面に遭遇する。今回の中川氏の講演はとても重要な情報だった。

講師4の松本氏は「便検査・尿定性検査について」をテーマに基礎知識を説明した。便検査は、便中のヘモグロビンを検査するものであり大腸がん検診の一次スクリーニングとして実施されている。便の採取は患者本人によるものが多く事前にしっかりと採取方法を説明することが必須となる。専用容器を使用し糞便の表面をまんべんなく複数回擦り取ることが大きな意義となる。便中化学検査では炎症性腸疾患（IBD）のバイオマーカーとしてカルプロテクチンは保険適応が拡大され今後の動向に期待したい。また尿試験紙法では注意事項として適切な保管がされていない場合、すぐに劣化し検査結果にも影響を及ぼす。また試験紙の項目ごとの原理の違いで、pHや尿の温度にも影響があることを理解することが必要である。

今回は全講演で問題を出題しながら進めていくことで、インプット・アウトプットが確立し理解につながったと考える。日常業務に役立つ内容が多く、非常に参考になる内容であった。

（文責：織田喜子）

## テーマ 免疫測定法の原理と特徴 ～ 異常反応例を交えて ～

主催 血清検査研究班

実施日時：2024年7月19日 19時00分～20時30分

会場：ソニックシティビル 905会議室 教科・点数：基礎教科ー20点

講師：岡倉 勇太（株式会社TLC 戸田中央臨床検査研究所）

参加人数：会員20名 賛助会員1名

出席した研究班班員：渡邊剛 岡倉勇太 飯山恵 深田愛 森圭介 吉田萌香 山本晃司

研修内容の概要・感想など

今回の研修会では、免疫測定法の原理と特徴、免疫検査における異常反応とその検証法に関する講義内容であった。

免疫検査では、抗原抗体反応を原理として広く用いられている。測定対象は、低分子から高分子化合物まで幅広く用いられ、臨床現場においては自動化が進んでいる。また、測定法は多様であり、その反応方法も様々である。特徴としては、生化学検査などの比色定量分析と比較すると、高感度で生体内のホルモンや腫瘍マーカー、サイトカインなどの微量成分の測定に優れている。その一方で、抗原や抗体を用いた測定法が故に、交差反応や非特異反応などは避けられない。イムノアッセイは大きく3つの要素により、分類できる。まず、反応様式により区別される。競合法は、検体中の目的対象物質とあらかじめ標識しておいた抗原または抗体を競い合わせ、シグナルの減少により対象物質の濃度を算出する方法である。比較的小さな分子においても測定可能であるが、ある程度の抗原量がないとシグナルの変化を検出しづらい。非競合法（サンドイッチ法）は、検体中の目的対象物質を2つの抗体で挟み混む（サンドイッチ）ことで、結合したもののシグナルの増強により濃度を算出する方法である。反応系において抗体過剰な状況で反応させているので、高感度化や測定範囲を広げることが容易である。抗体と抗体で目的対象物質を挟むことから、ある程度の分子サイズ（1,000以上）は必要で複数のエピ

トープが必須となる。次に、洗浄操作の有無により区別される。その洗浄操作のことをB/F分離と呼び、標識した抗原または抗体と結合したもの（B:Binding）と結合しなかったもの（F:Free）を選別し、結合したもののみを測定に用いる。最後に、抗原抗体反応した複合体を可視化するために各種の標識物質を用いて検出を行っている。その発光強度により感度に相違があり、化学発光、蛍光、吸光（呈色）の順に高いと言われている。今回は自動分析装置で導入施設の多い、化学発光を検出に用いた方法についての説明が中心であった。化学発光を用いた測定法には、2つのタイプが存在する。1つは、標識してある化学発光物質に光源を照射することで励起状態とし、物質が基底状態に戻ろうとする際に発光する現象を捉え、発光強度を検出する方法である。代表は、CLIAやECLIAである。もう1つは、標識してある酵素を反応させ、そのエネルギーにより発光物質を化学発光させる方法である。それが、CLEIAである。

免疫血清検査では抗体を用いて検出することが多く、ときに結果解釈の際に異常反応の可能性を考慮する必要がある。干渉する要因として、測定対象物質との類似性、試薬の構成成分、検体中の成分などが挙げられる。今回はその中で異常値を示した症例として2例が示された。1例目は、TP、RA、IL-2Rで反応タイムコースエラーをきたしたケースについて紹介された。検体の性状を確認すると、冷蔵保存で白濁を認めた。次に、クリオグロブリンの存在を予想し、加温処理したところ、濁りが消失した。さらに同定のため、免疫電気泳動を実施したところ、温度依存性M蛋白（IgM-κ型）の増加が確認され、クリオグロブリンが推定された。2例目は、異好抗体による非特異反応をしたケースについて紹介された。非特異反応の原因を特定することは困難なことも多いが、今回は異好抗体ブロッカーを用いた吸収試験で非特異反応が抑制された。

免疫検査は多種多様化しているため、異常反応や非特異反応など、結果解釈で苦慮することがある。今回の研修会の内容は、異常反応に遭遇した場合に自施設でも検証できることも多くあり、日常業務の再確認をする良い機会となった。

（文責：山本晃司）

## テーマ 『感染症について』 ～ 病理検査・微生物検査それぞれの視点から ～

主催 病理検査研究班 微生物検査研究班

実施日時：2024年7月19日 19時00分～21時00分

会場：浦和コミュニティセンター 第15集会室 教科・点数：専門教科ー20点

講師：霜島 正浩（株式会社スギヤマゲン）

今田 浩生（埼玉医科大学総合医療センター 病理部）

峰 宗太郎（厚生労働省 国立感染症研究所 感染病理部）

参加人数：会員69名 賛助会員6名 非会員2名（医師）

出席した研究班班員：

（病理検査）三鍋慎也 細沼佑介 小島朋子 松本祐弥 三瓶祐也 佐藤達也 渋谷樹

（微生物検査）小棚雅寛 酒井利育 今井芙美 渡辺駿介 佐々木真一

研修内容の概要・感想など

今回の研修会は病理検査研究班と微生物検査研究班の合同で企画し、病理検査・微生物検査それぞれの視点から感染症について考察することをテーマとして開催した。

霜島氏は微生物検査における感染症のポイントについて解説した。近年、薬剤耐性菌による菌血症が原因で多くの患者が死亡しており、今後対策が講じられなかった場合、死亡者はさらに増加すると推定されているため、適正な抗菌薬を使用することの重要性を踏まえた内容であった。細菌の正確な同定には、グラム染色が非常に有用であり、具体的な染色像の提示があった。簡便な染色だが得られる情報が多く、グラム染色で大枠の細菌を同定することが、抗菌薬の選択にも繋がることが分かった。また、血液培養検査も根拠に基づいた治療を行うため

に重要であり、採血についての具体的な解説がなされた。最後に院内感染の原因菌として多くの施設で最も問題となっている*C. difficile*についてその伝播経路や感染予防策について解説がなされた。作業環境のふき取りや手指洗浄の徹底が重要であるとのことであった。薬剤耐性菌や院内感染の対策における微生物検査の重要性を再認識した。

今田医師は感染症病理について、現場に即した具体的な内容を解説した。感染症における病理検査は容易ではなく、完全に特異的とは言い難いものの、メリットとしては、病原微生物の局在を証明できる点や、微生物に対する生体反応から病的であることを示すことができる点、感染症+ $\alpha$ の病態と併せた理解が可能である点が挙げられた。病理診断で感染を認識する際には、細菌・真菌・原虫などの病原微生物を直接同定できる場合と、感染に伴う組織反応から推定する場合があります、それらの診断は肉眼的観察やHE染色、特殊染色、免疫染色やISH法を用いて行われる。重要な点は、病原微生物が存在することと、病態の原因になっていることは必ずしもイコールではなく、臨床的な症状との相関が必要とのことであった。病理検査においては、病原微生物の同定よりも、その微生物によりどのような形態的变化を示しているかを重要視しているとのことであった。感染症の診断をする際の病理医の視点を学ぶことができる内容であった。

峰医師は感染症の病理検体を用いた病原体同定の手順について、最新の手法の説明を交えつつ分かりやすく解説した。感染症の病理診断では、病原体診断に加えて病原性の評価を行うことが大切であった。病理診断に付される可能性のある感染症は、臨床的に感染症が疑われていない場合も多く、通常業務の中に紛れ込んでくることもある。感染症の検索は本来、生検体であることが望ましいが、病理検体では既に固定包埋されてしまっている場合がある。固定された検体においても病原体の検索を行うことは可能で、IHC法、ISH法、PCR法、qPCR法、次世代シーケンサーなどの方法があるが、過固定にならないことやEDTAで脱灰を行うなどの検体処理が非常に重要であるということであった。未固定の検体がある場合は培養が可能で、質量分析が非常に正確な結果が得られるとのことであった。また、ウイルス分離も生検体でなければ行うことができない検査であり、臨床的に細菌感染症・真菌感染症・ウイルス感染症などを疑われる場合には未固定の検体を保存しておくことも重要とのことであった。検体の固定や保存について、臨床医や病理医も交えて事前の取り決めなどをしておくことが望ましいと思われた。我々臨床検査技師も、検査手段の把握や臓器と病態の関連の把握を行い、常に最新の情報にアップデートしていくことで、感染症の診断に貢献できると感じた。

本研修会では、微生物検査と病理検査という異なる視点から感染症の診断を考えることができた。それぞれの検査の特徴や得意な点を把握し、連携を取っていくことで、患者さんのアウトカムが良くなるような検査を行っていきたいと感じた。

(文責：渋谷樹)

## テーマ 令和6年度 輸血検査実技研修会

主催 輸血検査研究班

実施日時：2024年7月28日 9時00分～16時30分

会場：公立大学法人 埼玉県立大学 教科・点数：専門教科-20点

午前の部：新人技師や日当直で輸血に携わる技師必見!!

血液型検査の基礎を理解して、スキルアップを目指しましょう!

午後の部：不規則抗体検査に必要な技術と考え方を実践形式で学びましょう!

講師：輸血検査研究班班員

久保居 由紀子 氏 (JCHO埼玉メディカルセンター)

参加人数：会員32名

出席した研究班班員：宮澤翔子 岩崎篤史 岸健太 廣田渉 志村祥太 大垣秀友 佐々木翔太



### 研修内容の概要・感想など

今年度の実技研修会は午前の部を血液型検査、午後の部を不規則抗体検査に分けて行った。午前の部では基本操作の習得を目的とし、赤血球浮遊液の作製法や試薬検体の分注などの注意点を中心に3検体の血液型検査を実施した。参加者の手技と凝集の見方、結果の解釈について確認しながら、異常反応に対する原因や追加検査、輸血の対応について各班で話し合い、結論を出すことができた。

午後の部では2検体に対して不規則抗体検査スクリーニングから同定検査を実施しつつ、実技の合間に筆記の課題にも取り組んだ。基本操作はもちろんのこと、消去法から追加検査や適合血の選択まで指導を行った。

今回の研修会では輸血業務を始めて間もない技師や他業務を兼任している技師が多く参加していたため、ルーチン業務で感じている疑問点や各施設の現状などについて意見交換している場面もみられ、参加者同士でより高め合う研修会になった。輸血検査の自動化が進んでいく中でも、正しい手技と解釈・対応は必須である。参加者には研修で習得したことを各施設で実践し、安全な輸血療法に貢献することを期待したい。

(文責：岸健太)



## テーマ 細胞診標本実習 細胞検査士認定試験へ向けて

主催 細胞検査研究班

実施日時：2024年8月10日 9時00分～13時00分

会場：学校法人明星学園国際医療専門学校臨床検査実習室 教科・点数：専門教科ー20点

講師：細胞検査研究班一同

(鶴岡慎悟 船津靖亮 急式政志 野本伊織 猪山和美 稲山拓司 小川弘美  
並木幸子 加藤智美 中山美咲)

参加人数：会員30名

出席した研究班班員：鶴岡慎悟 船津靖亮 急式政志 野本伊織 猪山和美 稲山拓司  
小川弘美 並木幸子 加藤智美 中山美咲

### 研修内容の概要・感想など

本研修会は、細胞検査士認定試験の実技対策を目的とし、細胞診標本実習を主とした鏡検実習を実施しました。研修会では、多くの症例を鏡検してもらうために講義は行わず、スクリーニング26症例・同定33症例を用いた鏡検を中心に行いました。これらの症例は、過去の細胞検査士認定試験の出題傾向を鑑みて準備されました。

県内外から多くの会員の応募があり、特に細胞検査士認定資格をまだ取得していない県内会員と、抽選で当選された県外会員数名を含む30名が実習に参加しました。実習では、標本に対する詳細な解説を準備し、参加者が理解しやすいように工夫しました。参加者からの質問には細胞検査研究班が講師を担当し、個別に丁寧に対応することができました。参加者からは、「試験に近い形で実習を行うことができ、大変有意義だった」という声が多く寄せられました。

(文責：鶴岡慎悟)



**令和6年度  
公益社団法人埼玉県臨床検査技師会  
第6回 理事会議事録**

日時：令和6年8月8日(木) 18時30分より

場所：さいたま赤十字病院 7階会議室  
さいたま市中央区新都心1-5

議題：Ⅰ. 行動報告 Ⅱ. 報告事項  
Ⅲ. 承認事項 Ⅳ. 議題

出席：(理事)松岡 猪浦 山口 濱本 阿部  
三木 佐瀬 伊藤 塚原 神嶋  
笛木 長谷川 神戸 工藤  
久保田 長岡 原 土田

(監事)遠藤 細谷

欠席：(理事)網野 小林 藤原 西田

本日の理事会の出席者は20名であった。理事の出席者は18名で、現在22名の過半数に達しており、定款第33条第1項の決議を行うに必要な要件を満たしていることを確認した。

議長は、定款第32条第1項より、松岡優会長が務めることとなった。

### Ⅰ. 行動報告

(令和6年7月11日～令和6年8月7日)

7月11日(木)令和6年度第5回理事会：

松岡、猪浦、濱本、阿部、西田、  
三木、佐瀬、伊藤、網野、藤原、  
塚原、神嶋、笛木、神戸、小林、  
工藤、久保田、長谷川、長岡、原、  
土田、遠藤、細谷

7月11日(木)第1回事務局部会：

濱本、阿部、西田

7月13日(土)養成校連絡協議会会議：

猪浦、塚原、笛木

7月17日(水)令和6年度 第1回埼玉県医師会  
臨床検査精度管理委員会：

松岡、猪浦、山口、神戸、久保田、  
長谷川

7月18日(木)第52回埼玉医学検査学会実行委員  
会：伊藤、三木

7月21日(日)タスクシフト指定講習会(埼玉県  
026)：猪浦、山口、神戸、三木、  
佐瀬、小林、伊藤

7月23日(火)ワークライフバランス推進委員  
会会議：猪浦、塚原、神嶋、小林

8月4日(日)会計作業：神戸

### Ⅱ. 報告事項

#### 1 事務局

1) 7月11日(木)第1回事務局部会を開催した。  
(別紙資料1)

#### 2 総務部

1) 7月21日(日)タスクシフト指定講習会(埼  
玉県026)を開催した。(別紙資料2)

2) 8月15日(木)だより第543号発行予定

3) 8月18日(日)タスクシフト指定講習会(埼  
玉県 027)を開催予定。

(責任者)松寄、猪浦、神嶋、長谷川、  
伊藤(恵)、小林、伊藤(隆)、佐瀬

#### 3 事業部

1) 7月17日(水)令和6年度 第1回養成校連  
絡協議会会議を開催した。(別紙資料3)

2) 7月23日(火)令和6年度 ワークライフバ  
ランス推進委員会会議を開催した。  
(別紙資料4)

3) 深谷市福祉健康まつり実務委員公募につ  
いてHPへ掲載した。

#### 4 学術部

1) 7月8日(月)令和6年度理事研究班合同会  
議・第1回研究班運営委員会を開催した。  
(別紙資料5-1、5-2)

2) 10・11月生涯教育研修プログラムを埼臨技  
HPに掲載した。

3) 7月9日(火)使用回数の減少に伴いZoom  
契約2ライセンス契約を1ライセンスに削  
減した。なお、契約期間満了日は令和6年  
9月30日。

#### 5 精度保証部

特になし

#### 6 会計部

1) 令和6年度正会員費26名130,000円、入会  
金23名23,000円、再入会金3名3,000円、  
合計156,000円の入金があった。

2) 日臨技より、令和5年度定時総会議決権行  
使における回収手数料238,500円(受領率  
67.54%、2,385件×100円)、全国「検査と  
健康展」助成金500,000円、合計738,500円  
の入金があった。

3) 石井印刷に埼臨技だより第542号Web版  
16p. 77,000円、会誌Vol.71-No.1印刷代  
1,058,750円、仕分費31,900円、合計  
1,167,650円を支払った。

4) Microsoft365更新料24,737円を支払った。

5) Square(株)サポート部門より決済端末の不  
具合の対応について回答があった。  
(別紙資料6)

#### 7 精度管理委員会

1) 7月17日(水)令和6年度第1回 埼玉県医  
師会臨床検査精度管理委員会を開催した。  
(別紙資料7)

## 8 一都八県会長会議

特になし

## 9 日臨技関甲信支部

特になし

## 10 日臨技

特になし

## 11 第52回埼玉県医学検査学会

- 1) 7月18日(木)第10回実行委員会が開催された。  
(別紙資料8)

## 5 精度保証部

特になし

## 6 会計部

特になし

## 7 精度管理委員会

特になし

## 8 第52回埼玉県医学検査学会

特になし

## 9 関甲信支部・首都圏支部医学検査学会

- 1) 一般演題座長推薦について(別紙資料9)  
松岡優会長より、微生物、免疫血清、一般検査に関して各研究班に依頼中であるが、管理運営に関しては理事内で推薦したいとの発言があった。猪浦一人副会長が立候補し、審議の結果、承認された。

## Ⅲ. 承認事項

## 1 事務局

- 1) 会員動向(令和6年度分)  
令和6年8月1日現在  
会員数 3,658名 [令和5年度会員数3,572名]  
(新入会員224名)  
賛助会員 69社 [令和5年度71社]  
承認された。

## 2 総務部

特になし

## 3 事業部

特になし

## 4 学術部

- 1) 研究班運営マニュアル(フォルダ)内容の追加・改訂について(事前送付)  
上記の件について、長岡勇吾理事より発言があり、審議の結果、承認された。
- 2) 企業協賛について  
11月24日血液検査研究班  
シスメックス株式会社：鏡検実習で使用する画像共有機器の借用  
上記の件について、久保田亮学術部長より発言があり、審議の結果、承認された。

## Ⅳ. 議題

## 1 事務局

特になし

## 2 総務部

特になし

## 3 事業部

特になし

## 4 学術部

特になし

## 5 精度保証部

特になし

## 6 会計部

特になし

以上で本日の議事を終了し、議長は協力を謝して閉会とした。

## あ と が き

日中体温越えの気温が続いていますが体調は大丈夫ですか？

天候も晴れの日もあればゲリラ豪雨で大変な日もあります。

先日、日直中に徐々に停電になりました。雷による停電です。計画停電と違い突然、検査機器が一斉に落ち、その後本当に大変でした。検査機器は無事でしたが、PCが再起動できないものが出てきたりしました。とりあえず、検査業務は続けることができ、仕事に支障がないようにして、当直業務に引継ぎを行いました。このようなことがあると、停電対策マニュアルの整備や、停電トレーニングを常にしておくことが大事だと大変身に沁みました。

まだまだ、暑い日が続きます。自分の体調を見ながら、仕事に、プライベートに充実させていきたいと思っている今日この頃です。

(土田 記)

